

# 岐阜大学国際交流ニューズレター

Newsletter of International Exchange, Gifu University

No.34 2009年2月



## ▲パイロイト大学(ドイツ)

2008年9月1日学術交流協定締結。パイロイト大学はドイツ国バイエルン地方にある総合大学であり、特に科学や工学に特色をもつ。ヨーロッパだけでなく、アジアからの留学生も多い。キャンパスは自由な雰囲気にあふれている。



## ▲西南交通大学(中国)

2008年9月5日学術交流協定締結。1896年創立で100年以上の歴史を持つ大学。正門を入ると、正面に写真の弁公大樓がそびえる。工学を特色とするが、文学、経済学、管理学、法学なども兼ね備えた国家重点大学である。



## ▲シバジ大学(インド)

2008年3月18日学術交流協定締結。インド西部マハラシュトラ州南部の都市コラプルにある1962年創立の総合大学。ムンバイから飛行機で約1時間。“シバジ”の名は、マラータ帝国の偉大な戦士 チャットラパティシバジから名づけられる。

## ▼木浦大学(韓国)

2008年2月26日学術交流協定締結。1946年に創立された、韓国の全羅南道にある国立大学。6学部、4大学院を有する総合大学で、約9000名が学ぶ。



## 留学生30万人計画と国際化拠点30大学構想



岐阜大学国際交流委員会委員長  
(副学長)

土肥修司

岐阜大学の国際化をどう図るか、国際交流委員会は大いに揺れている。その背景には、わが国の社会が急速に多文化化と多民族化とすすんでいく中で、昨2008年7月末に文科省、外務省、厚労省など六省から交付された「留学生30万人計画」があり、その骨子にある「国際化拠点30大学」構想がある。大学教育の国際化とグローバル化にどう対応していくか、拠点大学への申請に足る実績を重ねるには一体何が重要か、岐阜大学の国際社会貢献やその果たすべき役割はなにか、という問題を委員会でも学内でも議論していかなくてはならない。

日本への留学生数が、昨年度は過去最高の12万3,829人になった。岐阜大学への留学生は360人から450人とこの規模の大学としては多い。その半数以上が中国からの留学生で、アジア圏で90%近くである。国全体の外国人登録者は

1988年には約80万人であったのが、2006年には208万人に達している。岐阜県に限っても、昨年暮れには県民210万人に対して外国人登録者は56,824人、そのうちブラジル20,912人であるという。隣人の37人に1人が外国籍をもった人であり、私たちの老後の生活は、外国籍を持った人に委ねなければならない共存社会となっているのである。

留学生との科学・文化面での交流や彼らへの教育・研究指導を通して、国際的な刺激を得るのみならず、国際語によるコミュニケーションの重要性を体得し、そして異文化を学び、理解する。また国際的な共同研究の遂行によって学問探求への意思をより強固なものとする。ここに国際交流の原点がある。現在、本学は世界14カ国に36の交流協定大学をもち、学生・留学生を問わずさまざまな機会を提供し、交流の促進を支援している。「岐阜大学の国際化」や「キャンパスの国際化」をどう推進していくか、さまざまな意見があるに違いない。国際交流委員会では、Convivial Meetingや国際化“強化”週間などを通して、グローバルな視点からのさまざまな意見を求めていくつもりである。

## 外国人留学生からのメッセージ



工学研究科  
環境エネルギーシステム専攻2年  
コウ ケツ  
**XIANG JIE** (中国)

### コミュニケーションは挨拶から

日本語には尊敬語や謙遜語、丁寧語、また話し言葉や書き言葉などが多く外国人にとって決して覚えやすい言語ではありません。学校で習うものはほとんど「です」「ます」形の文章ですが、実際の生活用語とかけ離れているところも多いと思います。私は日本に来たばかりのころは予想していた以上に日本が理解できず、正直なところ不安のほうが大きかったような気がします。

しかし、日本語は挨拶語がとても豊かで、人と人を自然に繋ぐ力を持っている言語だと私は思います。それは日本人の相手のことをよく気を配る性格の現れだと言えるでしょう。

こんな日本人の挨拶精神が職場や



家庭、学校と言ったあらゆる場面を暖かく包まれていると思います。例えば、アルバイト先ではようございます。お先に失礼します。後よろしくお願ひしますと爽やかに挨拶してくる人がいると自分も自然と元気になって癒されます。私はこの挨拶という言葉を一語をきっかけに人と人のコミュニケーションは生まれると考えてきましたし、こんな考えの下で誰とも気軽に挨拶をしてきました。おかげで、爽やかな挨拶から多くの方々と交流するチャンスがたくさん作れています。これからも日本語の挨拶語という強い武器を大事に尊敬語や謙遜語、丁寧語、また話し言葉や書き言葉などややさしい日本語もマスターし、日本社会に溶け込めるよう努力していきたいと思っています。

(原文のまま)



## 外国人留学生からのメッセージ



留学生センター特別聴講学生  
ジェイサダウオンラウ  
**JEDSADAWONGLERT**  
パニダ  
**PANIDA** (タイ)

### 思ったよりよかった!! (^-^) !!

留学生といえば、どう思いますか。私はタイで日本語を勉強している。なぜなら、日本のことについて興味があるからだ。それで、一度日本へ来てみたいと思った。

私はチャンマイ大学から、交換留学生として岐阜大学に来た留学生だ。日本語を勉強するだけではなく、日本の文化や様々な国の文化や勉強することも出来ると思う。最初、日本へ来る前に私が様々なこと心配でならなかった。たとえば、友達が出来るかどうか、生活することも勉強することも出来るかどうか分からなかった。しかし、日本に来てから思ったより楽しかった。皆は本当に私の家族のような気がしている。

そして、教室の中で勉強する以外であるとともに、「留学ラブ」にも入った。そのため、日本人の友達が多く出来た。なぜなら、毎週の水曜日、一緒に昼ごはんを食べたり、喋ったりしたからだ。また、よく面白い活動を一緒にした。たとえば、お御興やWelcomeパーティーなどだ。きわめて楽しかった。それに、世界の国の人でも性格や文化や伝統など分かってしまう。私は一番好きなのは様々な国の料理を食べてみた。面白くて美味しかった!! 特に、韓国料理だ。韓国の友達は料理が出来ないくせに、

たいへん頑張って作ってもらった。本当にありがたいよ!!

ところで、日本の文化にも茶道というお茶をすること勉強した。偉い先生から教えていただきました。始めた時、難しかったが、茶道をよく練習するにつれて、さらに楽しくなった。

留学生として日本へ来たことは私が全部で話す言葉で言えないと思う。様々なやったこと本当にいい記憶をもらった。岐阜大学に来たことは私の人生における最良の日であった。また、先生でも留学生センターでも最高にお世話になった。外国人にとっては日本語を話せなくても困らないと思う。この記事を書くにあたり、皆様に様々な手伝ってくれたので、心からありがとうございます。タイへ帰ったら、日本にいた時のことを思い出すが、もちろんニコニコしてないではいられないと思う。ここに来たチャンスがある人はもう一度ここに戻りたいに違いないと思う。私にはこんな感じもしている。日本にいる時間は短いと思うのだろうか。

(原文のまま)



## 留学体験記



工学部生命工学科4年

### シドニー工科大学に 留学中

安田 悠里

## 日本との文化の違い

シドニーに来て5ヶ月が経ちました。夏休み中の今は、授業と宿題に追われていたセメスター中と違い、友達とカフェやビーチに行きのんびりとした時間を過ごしています。

この5ヶ月間はたくさんの人と出会いました。私と同じように交換留学生としてシドニー工科大学に来ている日本人や外国人、寮に住んでいる学生、日本語を勉強している学生などさまざまです。その中でも特にシドニー工科大学には、日本人の学生とローカルの学生が交流するサークルがあり、そこで多くの友達を作ることができました。たくさんの人たちが日本に興味を持ってくれており、とても嬉しく思います。



私は、シドニー工科大学で、前学期にオーストラリアの文化を学びました。オーストラリアの文化で興味深いもののひとつは、多文化社会だと思います。それは授業からだけでなく、日々生活していても感じることができます。オーストラリア人というと、白人を思い浮かべがちですが、アジアを含めた世界各地からの移民が多く、街中ではいろいろな顔を持った人たちを見かけることができます。また、多文化社会ということ以外にも、日本とオーストラリアの文化の違いを知ることができるのは、留学生活の面白みのひとつです。

残り約半年となった留学生活、まだまだ自分の英語に不自由さを感じますが、帰国するときに「留学してよかった」と思えるように、前向きに頑張り、成長して帰りたいと思います。

## 留学体験記



教育学部英語教育講座4年

### ノーザンケンタッキー 大学に留学中

高屋 育枝

## たくさんの人に支えられて

まず私が留学を決意した一番の要因はサークルにあります。留学ラブサークルで留学に行かれた先輩や、岐阜大学の留学生と交流する中で、彼らから留学の楽しさを教えてもらい、私も行ってみようと思えました。

大きな期待と少しの不安で留学生活が始まったものの、最初は苦労の連続で、英語で自分の思いがうまく伝えられない、宿題に追われてばかりいるといった状態でした。しかしせつかくの留学生活を無駄にしたいとは思わず、分からないことはとにかく友達や教授、チューターに聞くようにしました。するといつの間にか、自分のペースをつかみ、勉強も友達と過ごす時間もとても楽しいものになっていきました。英語や教育の勉強、そしてアメリカ理解といっ

た私がやりたかったことが実現できた留学生活だったと思います。最初はいろいろ迷いましたが、留学を通して学んだことは計り知れなく、今は思い切って挑戦してみても本当によかったな、と思っています。でもそれはもちろん周りのみんな、家族、先生方の支えがあつてのことですし、とても感謝しています。

私は将来、英語教員になろうと思っています。この留学を通して学んだことは、英語教員としての私のどこかで大きな自信につながると思います。この経験を最大限に生かし、教壇に立ったとき、生徒に英語を学ぶ楽しさ、外国の文化や習慣といったものを伝えていきたいです。



## 第6回 日本・ブラジル/ 地域・地球環境国際ワークショップ（2008年10月23・24日開催）について JAPAN-BRAZIL EXCHANGE OF PERSONNEL



学術交流協定大学  
カンピーナス大学（UNICAMP, ブラジル）

Carlos K. Suzuki

Coordinated by Prof. Hiroshi Moritomi (Gifu University), the Sixth Bilateral Japan-Brazil Workshop took place last October in Gifu under the thematic of *renewable energy, environment and sustainable development*. The other five previous workshops, three of them held in Brazil and two in Japan were also related

to the same subject. The results were very fruitful in terms of exchange of experience and knowledge. At present however, taking opportunity of the commemoration of Centenary of Japanese Immigration in Brazil, it is worthwhile to make a balance under another view concerning these six workshops organized by UNICAMP and Gifu University, with the participation of Kyoto Univ., Univ. of Tokyo, Univ. of Kyushu, and Tokyo Univ. of Agriculture and Technology.

Nevertheless before doing this, it is highly pertinent to reminisce the main points of history of Japanese immigrants in Brazil. Due to an unrealized dream (the initial plan of immigrant was to make a fortune in Brazil and return home after a few years working), the immigrant was able to create a fantastic Nikkei community fully integrated to the Brazilian society, that has been making an effective and remarkable contribution to this country during the last 100 years. Brazil has become one of the main global actors in strategic areas, such as food production, biofuel, natural resources for industrial use, and aerospace technology. In the new scenario for the next 100 years, the Brazil-Japan partnership is strategic for both countries and particularly for the global equilibrium. It has also a great complementarity in social, economical, technological and cultural aspects. Nevertheless, some vital questions arise: Are we aware of such opportunity or even necessity? The Universities, whose main function is the training of high level human resources responsible for the challenges and successes of such international partnerships, are effectively preparing the young students for such a mission?

Practically no contributions to these questions were discussed or implemented in the six events of Japan-Brazil Bilateral Workshops, which started in 2003. In a period of global recession, maybe it could be an interesting procedure to act more pragmatically on these points. Some of the more urgent steps are probably feasible and under our control:

- (1) to make compatible the undergraduate curricula of the Universities involved so that the foreign students could be mutually able to validate credits obtained during their stays; the same should be compatible for the graduation thesis; to encourage also the “sandwich program” for the research of post-graduate students;
- (2) particularly for “distant languages”, as the case of Portuguese and Japanese, a modern and special teaching methodology development is vital; the success of exchange program and international cooperation depends basically on the **communication**; for the Japanese student it could be an attractive factor to know that by studying Portuguese, he would be able to open the doors of other Neo-Latin languages, Spanish, French, Italian, Rumanian and Catalan;
- (3) beside the academic programs, it is fundamental the involvement and participation of enterprises to implement the two-ways “internships”; certainly such activity will redound in benefit to the own enterprise;

The main purpose of the present article is to promote discussions, comments, criticisms and suggestions on how to make improvements in the exchange of personnel between Brazil and Japan, how to motivate and how to offer advantages for the foreign student. Also, how to lower the barrier, on both, cultural and linguistic points of view, and especially to make a great contribution for the internationalization of young student. For the next Japan-Brazil Bilateral events, it is a high priority the inclusion of items (1) to (3) in the thematic of program.



日本側参加者（東京大、岐阜大、在名古屋ブラジル総領事、岐阜日伯協会）とカンピーナス大学参加者との集合写真

## 海外実習報告



岐阜大学教育学部教授

小林 浩二

### ドイツの実習を終えて

昨年の12月13日(土)から12月23日(火)までの11日間、海外実習を行った。この企画は、数年前から教育学部のカリキュラムに組み込んで実施しているものである(科目名は総合文化海外実習で3単位)(旧カリキュラムでは国際理解実習)。私自身、今回で3回目の実施となる。

今回も、ドイツを対象地域にした実習で、訪問先と主な実習内容はつぎのとおりであった。1) エアフルトErfurt: エアフルト大学で学生との合同ゼミ(テーマは、「外国人労働者の受け入れと教育」)、基礎学校「トーマスマン」訪問、2) ボンBonn: ボンの変化に関する調査(ベルリンへの首都移転後、ボンはどのように変化したか)、ボンの南20kmのアール川流域のエクスカージョン、(ブドウ栽培とワイン醸造) 古都アールヴァイラーの特色)、3) ミュンヘンMünchen: 都市構造の調査、ダッハウの強制収容所訪問など。

今回のドイツ実習の成果として、エアフルト大学の学生との合同ゼミを通して、岐阜県における外国人労働者の実態を紹介できたこと、基礎学校「トーマスマン」の教育方針を知ることができたこと、そして、エアフルト、ボン、ミュンヘンのそれぞれの都市の特色を知ることができたことがあげられよう。特に学生達にとっては、基礎学校「トーマスマン」が生徒の自主的な取り組みを重視

していること、ドイツの都市では公共交通一とりわけ路面電車が重要な役割を果たしていること、ドイツの都市には数百年も経つ古い建物が多く残存していること等を知り、とまどいにも似た強い印象を受けた様子だった。学生達は、改めて日本との政治や文化の相違を実感したのだろう。

ドイツの海外実習に参加した学生全員が、帰国後のアンケートに「今回の実習はさきわめて有意義で楽しかった」と回答してくれた。私にとっても、「教育とは何か」を問い直すよい機会となった11日間だった。

今回のドイツの海外実習を企画、実施するに当たって、特に、エアフルト大学の仁科陽江先生、エアフルトのフロイント先生(Frau A. Freund)、基礎学校「トーマスマン」校長のショーバー先生(Frau Schober)、ボン大学のテプファー先生(Prof. Dr. H. Toepfer)にひとかたならぬお世話になった。記して感謝の意を表したい。



▲エアフルト大学にて、仁科先生と(2008年12月15日)

▼基礎学校「トーマスマン」にて(2008年12月16日)



## 岐阜大学国際交流事業

### 私費外国人留学生を対象とした奨学金制度

**私費外国人留学生学資援助金**／奨学金：月額3万円、奨学金付与期間：1年間、採用人数：5人

**国際調和クラブ外国人留学生奨学金**／理系大学院生を対象とした奨学金制度

奨学金：月額5万円、奨学金付与期間：1年間、採用人数：7人

**交換留学(受入)推進制度奨学金**／学術交流協定校から受入れる交換留学生を対象とした奨学金

奨学金：月額3万円、奨学金付与期間：半年、採用人数：4人

### 日本人学生を対象とした海外留学奨学金制度

#### 岐阜大学短期留学(派遣)奨学金

本学と学生交流に関する学術交流協定を締結している外国の大学(p6協定校一覧参照)へ、短期間留学を希望する学生(外国人留学生を除く)に対して、経済的支援を行い、外国留学の機会を拡大することにより学生の国際交流意識を高め国際感覚を備えた人材の養成を目的とする。

奨学金：月額5万円(派遣先大学の国によっては月額4万円) 採用人数：3人以内

#### 文部科学省事業「留学生交流支援制度(短期派遣)(仮称)奨学金」

日本の大学及び大学院が、諸外国の大学との学生交流に関する協定等に基づいて、3か月以上1年以内、当該大学(p6協定校一覧参照)に学生を派遣する場合、その学生を支援する制度です。従前のJASSO(独立行政法人日本学生支援機構)による短期留学推進制度(派遣)は、平成21年度からは新たな文部科学省事業となり標記名称になる予定です。応募資格及び条件は従前とほぼ同じです。

奨学金：月額8万円 採用人数：平成20年度実績1人

上記制度による奨学生の募集は、毎年10月頃に各学部・研究科に通知します。資格及び条件等詳細については、学務部留学生課にお尋ねください。

また、奨学金が付与されなくても、自費(私費)により学術交流協定校へ留学する制度もあり、派遣先大学における授業料等の免除と一定数の単位互換が認められます。(こちらも詳細については、学務部留学生課へ照会ください。)

## 学術交流協定締結 (平成20.12.1現在)

### ■大学間協定(36大学) ※印は、授業料等相互不徴収制度のある大学を示す。

大学名	国名(所在地)		大学名	国名(所在地)	
※カンピーナス大学	ブラジル	サンパウロ州カンピーナス	※シドニー工科大学	オーストラリア	ニューサウスウェールズ州シドニー
※サンディエゴ州立大学	米国	カリフォルニア州サンディエゴ	※バンノン大学	ハンガリー	ヴェスプレーム
※浙江大学	中国	浙江省杭州市	アンダラス大学	インドネシア	西スマトラ州パダン
※広西大学	中国	広西省南寧市	※バングラデシュ農業大学	バングラデシュ	マイメンシン
※電子科技大学	中国	四川省成都市	※エルフルト大学	ドイツ	エルフルト
※江南大学	中国	江蘇省無錫市	※吉林大 学	中国	吉林省長春市
中国医科大 学	中国	遼寧省瀋陽市	※チェンマイ大 学	タイ	チェンマイ
※ルンド大 学	スウェーデン	ルンド	※ダッカ大 学	バングラデシュ	ダッカ
※ノーザンケンタッキー大 学	米国	ケンタッキー州ハイランドハイツ	※モンクット王トンプリ工科大学	タイ	バンコク
※ソウル産 業大 学	韓国	ソウル	※華 僑大 学	中国	福建省泉州市
※グリフィス大 学	オーストラリア	クイーンズランド州サウスポート	※同 濟大 学	中国	上海市
※ユタ大 学	米国	ユタ州ソルトレイクシティ	※ラ ン ボ ン大 学	インドネシア	ランボン州バンドル・ランボン市
※ユタ州立大 学	米国	ユタ州ローガン	ポ ー ト ラ ン ド 州 立 大 学	アメリカ	オレゴン州ポートランド市
※ハノイ工 科大 学	ベトナム	ハノイ	※内 蒙 古大 学	中国	内モンゴル自治区フフ・ホト市
※ウェストバージニア大 学	米国	ウェストバージニア州モーガンタウン	※木 浦大 学	韓国	全羅南道務安郡
※カセサート大 学	タイ	バンコク	※シ バ ジ大 学	インド	マハラシュトラ州コラプール
※アパティダンディ大 学	連合王国	スコットランド州ダンディ	※西 南 交 通大 学	中国	四川省成都市
※内 蒙 古 農 業大 学	中国	内モンゴル自治区フフ・ホト市	※バ イ ロ イ ト大 学	ドイツ	バイロイト

### ■部局間協定(8機関) ※印は、授業料等相互不徴収制度のある大学を示す。

大学・学部等名	国名(所在地)		協定部局	大学・学部等名	国名(所在地)		協定部局
チュラロンコン大学理学部	タイ	バンコク	応用生物科学部	※国立全南大学校工科大学	韓国	光州市(クアンジュ)	工学部
コンケン大学農学部	タイ	コンケン	応用生物科学部	※シドニー大学文学部	オーストラリア	ニューサウスウェールズ州シドニー	教育学部
コンケン大学学部 間共同開発研究所	タイ	コンケン	応用生物科学部	※ベンハー大学獣医学部	エジプト	ザガジグ	連合獣医学 研究科
※浙江大 学医 学 院	中国	浙江省杭州市	医学部	国 立 獣 医 科 学 検 疫 院 獣 医 科 学 研 究 所	韓国	京畿道安養市	応用生物科学部
※コンケン大 学医 学 部	タイ	コンケン	医学部	コ ロ ラ ド 州 立 大 学	米国	コロラド州フォート コリンズ	医学部

## 国際交流状況について

### 1. 岐阜大学外国人研究者受入数

(平成20.12.1現在)

	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	応用生物科学部	その他	合計
私 費	0	1 (0)	2 (2)	3 (0)	2 (2)	0	8 (4)
委任経理金・その他	0	0	0	3 (0)	6 (3)	1 (0)	10 (3)
合 計	0	1 (0)	2 (2)	6 (0)	8 (5)	1 (0)	18 (7)

1か月以上本学に滞在し、岐阜大学外国人研究者受入れ規則に基づき、受入れを承認された外国人研究者をいう。( )内は、女子を内数で示す。

### 2. 岐阜大学外国人研究者などの訪問数(1月未満)(平成19年度)

	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	応用生物科学部	その他	合計
合 計	27	17	7	27	15	55	148

1. 以外で、本学に短期間滞在した外国人研究者等をいう。

### 3. 岐阜大学教職員海外渡航者数(平成19年度)

	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	応用生物科学部	その他	合計
出 張	28	15	112	186	61	86	488
研 修	8	7	9	2	3	2	31
合 計	36	22	121	188	64	88	519

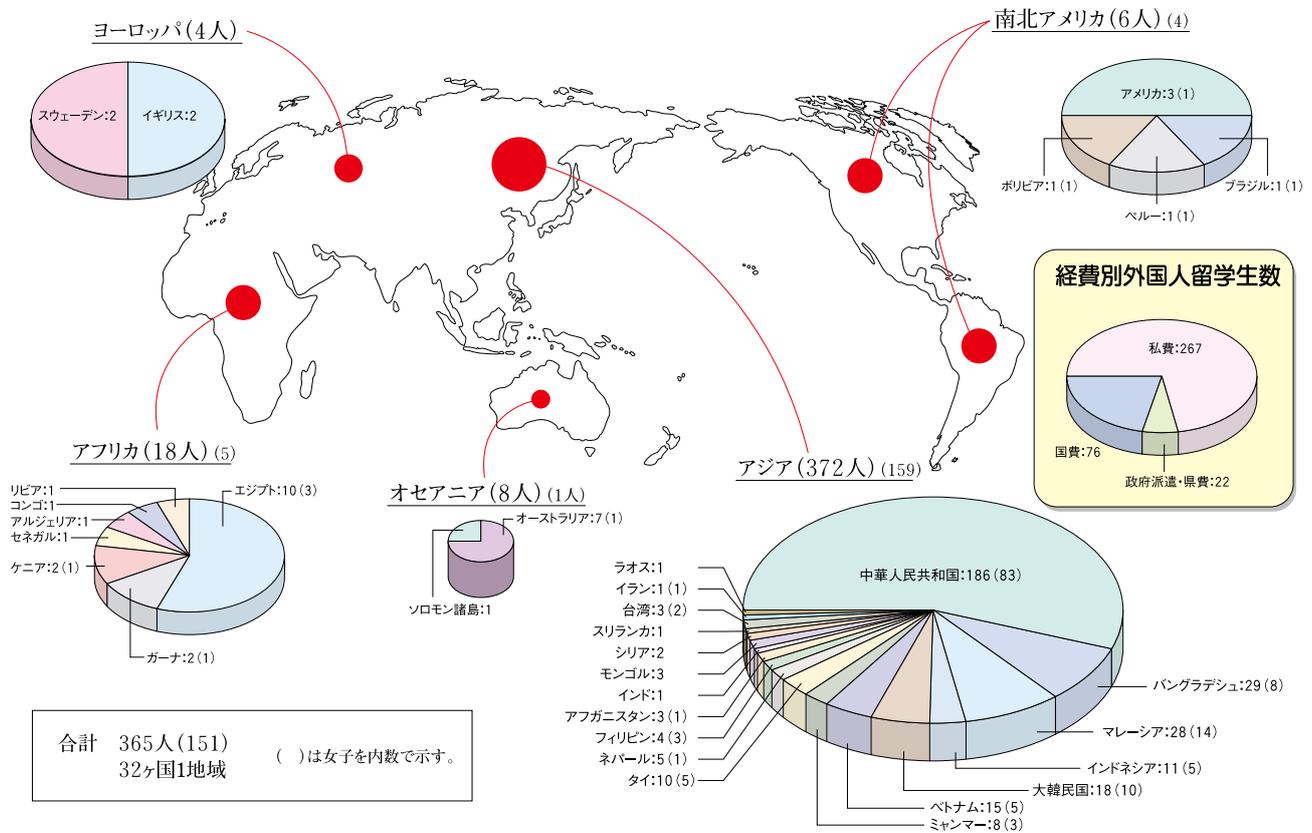
(私事・休職渡航を除く。)

### 4. 岐阜大学学生の留学者数(平成19年度)

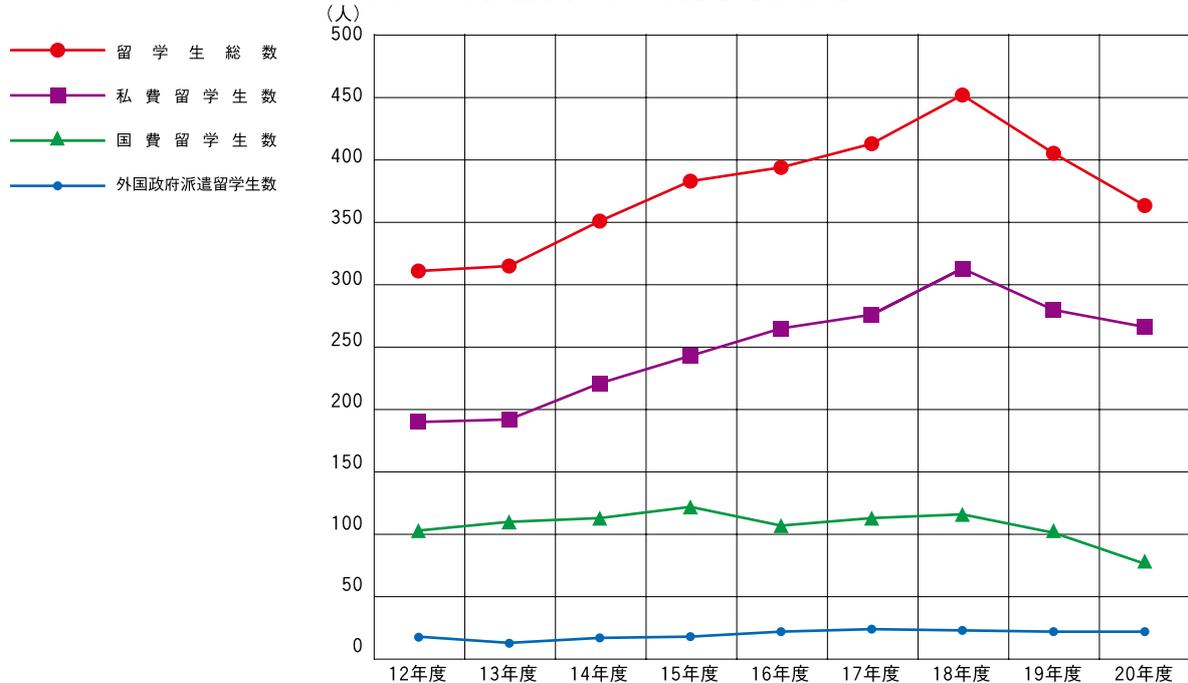
	教育学部 教育学研究科	地域科学部 地域科学研究科	医学部 医学系研究科	工学部 工学系研究科	応用生物科学部 農学部農学研究科	連合農学研究科	連合獣医学研究科	合計
短期留学推進制度 (奨学金受給者)	1	0	0	0	0	0	0	1
岐阜大学奨学金	2	0	0	0	0	0	0	2
私費留学	2	0	0	1	0	0	0	3
サマースクール	4	3	0	4	4	0	0	15
休学による留学 (講学研修等含む) (協定校以外)	4	0	4	10	3	0	0	21
合 計	13	3	4	15	7	0	0	42

# 岐阜大学国別外国人留学生数

(2008年12月1日現在)



## 外国人留学生受入数(経費別推移表)



留学生総数	311	315	351	383	394	413	452	405	365
私費留学生数	190	192	221	243	265	276	313	280	265
国費留学生数	103	110	113	122	107	113	116	103	78
外国政府派遣留学生数	18	13	17	18	22	24	23	22	22

## 平成19年度国際交流奨学寄附金協力団体一覧

イビデン株式会社  
エイト工業株式会社  
株式会社エヌテック  
株式会社大垣共立銀行  
株式会社十六銀行  
株式会社スギヤマメカレト  
河合石灰工業株式会社  
岐阜車体工業株式会社  
岐阜信用金庫  
岐阜乗合自動車株式会社  
国際ソロプチミスト岐阜  
財団法人井上国際交流基金

財団法人国際調和クラブ  
財団法人田口福寿会  
サンメッセ株式会社  
大日コンサルタント株式会社  
太平洋工業株式会社  
東邦ガス株式会社岐阜営業所  
日東興産株式会社北方自動車学校  
日本耐酸壇工業株式会社  
ハートランス株式会社  
三田洞自動車学校  
ユニオンテック株式会社

5頁に掲載の事業は上記の企業・団体からのご寄附により賄われております。誌上を借りて、厚くお礼申し上げます。(50音順、敬称略)  
そのほか、岐阜ソニータクラブ、岐阜西ロータリークラブ、岐阜東ロータリークラブ、郡上八幡国際友好協会及び国際交流の輪の黒野の各団体には側面から留学生をサポートいただいております。誌上を借りて厚くお礼申し上げます(50音順、敬称略)

## 外国人留学生支援団体に対する感謝状の贈呈

岐阜大学国際交流委員会では、本学に在学する留学生やその家族に対し長年に亘り生活上の支援活動を行ってこられました国際交流支援団体『国際交流の輪の黒野』に対し、国際交流委員会委員長名による感謝状を贈呈いたしました。

同団体は年間を通し、お花見大会、秋の収穫祭、餅つき大会と日本の正月などの各種行事の開催に加え、アルバイトの紹介、引越しの手伝い、生活物資の支援など、本学留学生の生活上の支援活動を継続して行っている団体です。



『国際交流の輪の黒野』の皆さん、留学生とその家族  
(岐阜大学国際交流会館前)



餅つき大会のイベント、花餅コンテスト  
入賞者の皆さん

感謝状は、12月14日(日)に岐阜大学国際交流会館前で開催された同団体主催による『第14回餅つき大会と日本の正月』の当日、参加した多数の外国人留学生が見守る中、大学関係者から同団体代表者である工藤治示氏に贈呈いたしました。

## 岐阜大学国際交流促進のための奨学寄附金のお願い

岐阜大学における国際交流促進のための奨学金の御寄附をお願いいたします。

【岐阜大学国際交流HP】 <http://www.gifu-u.ac.jp/list.rbz?nd=32&of=1&ik=1&pnp=32>

【奨学寄附金募集HP】 <http://www.gifu-u.ac.jp/view.rbz?nd=32&of=1&ik=1&pnp=32&cd=168>

本学への寄附金は、所得税法第78条第2項第2号及び法人税法第37条第4項第2号に基づき、財務大臣が指定した寄附金(昭和40年4月30日大蔵省告示154号)に該当するもので、所得税法上の寄附金控除の対象となる特定寄附金または法人税法上金額損金算入を認められる指定寄附金として財務大臣から指定されています。また、相続、遺贈により財産を取得し、申告期限までに本学に寄附された場合は、租税特別措置法第70条第1項により、相続税は非課税になっています。

編集者：国際交流委員会：ラッセル、ジョン・ゴードン(地域科学部) 柳井徳磨(応用生物科学部)

留学生交流委員会：小西 豊(地域科学部)

事務局：後藤喜美男(国際・研究支援課) 眞野 初(留学生課)

学術情報部国際・研究支援課(TEL:058-293-2011・2196 FAX:058-293-3209 E-mail:int\_exch@gifu-u.ac.jp)

学務部留学生課(TEL:058-293-2139・2137 FAX:058-293-2143 E-mail:direct@gifu-u.ac.jp)

ホームページ：<http://www.gifu-u.ac.jp/>

本誌は岐阜大学ホームページ上でも公開されています。

(<http://www.gifu-u.ac.jp/view.rbz?nd=32&of=1&ik=1&pnp=32&cd=257>)